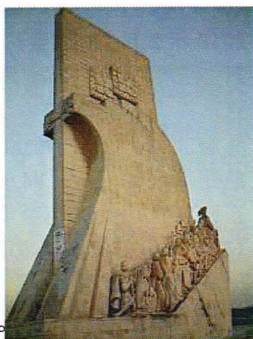


## ◆発見のモニュメントに潜む謎◆

伊川健二

リスボン観光をする時、多くが真っ先に訪れるのは、ベレン歴史地区ではないだろうか。団体旅行では、ベレンの塔から発見のモニュメントを通り、ジェロニモス修道院へのルートは必須であるし、個人旅行であれば、それにパシュティシュ・デ・ベレンや考古学博物館などを加えることもできるであろう。長期滞在であれば、そのひとつを衝動的に訪れたくなり、フラッと足を運ぶことも難しくはない。

その発見のモニュメントは、サラザール時代の1960年、エンリケ航海王子の500回忌を記念して建てられたことはよく知られており、その敷地の世界地図には、大航海時代にポルトガルがそれぞれの地域へ到達した年が記載されていることをご存じの方も多であろう。そして、そのなかの日本の到達年次が1541年とされていることもガイドブックなどで紹介されているとおりである。



問題はここからである。ひと昔前までは、ポルトガル人初来といえば鉄砲伝来であり、鉄砲伝来といえば1543年というのが常識であったが、近年では多少事情が変化しつつある。じつは、ポルトガル人の日本初来については諸説あり、最近では1542年説を紹介した教科書も存在する。だとしても1541年というのはどこから出てきた数字なのだろうか。筆者も、日本でこの数字を論じた研究成果に接したことがない。必ずしも日本にのみ関心を持っているのではない、ポルトガル人のおおらかさによる錯誤であろう、と判断するのが常識的な考え方ではないだろうか。筆者もかつてはそのように認識していた。

ところが、である。2005年12月5～6日に国立古美術館で開催されたワークショップの折、ジョゼ・マヌエル・ガルシア氏より一片のコピーを見せていただいた。それは、同氏の編になる『イエズス会士日本通信』写真版の解説であった。そこには、フェルナン・メンデス・ピントの証言の口述筆記の写真が掲載されていた。

これはあとから知ったことであるが、この口述筆記は1924年にはすでに刊行されており、ヨーロッパ語圏の研究者には早くから知られた歴史資料である。フェルナン・メンデス・ピントは、『東洋遍歴記』の著者として知られ、のちにイエズス会を除名された事跡も相俟って、その叙述の信憑性は必ずしも高く評価されてはいない。一方で、彼の証言を書きとめたのは、イエズス会の高名な歴史家ジャンピエトロ・マッフェイである。その概要は下記のとおり。

2～3人のポルトガル人とともに中国船のなかにいたピントは、水不足の辛苦に耐えながら、1541年6月24日「タノシマ」へ到着する。「タノシマ」は種子島とみてよかろう。彼らは種子島恵時、時堯と思われる親子と出会い、それが日葡貿易のはじまりであると伝える。この口述の真偽をとまかくとしても、発見のモニュメントの世界地図における、日本「発見」年次「1541年」には一応の根拠があったのだ。

(日ポ協会会員・大阪大学・准教授)

